

シェイクスピアの修辞法に関する一考察

—『ヘンリー五世』における反復技法について

古庄 信

Abstract

The purpose of this study is to observe Shakespeare's technique in rhetoric, especially on the repetition of words, phrases and sentences, or the lining up of the variation of these factors, and to identify how his rhetoric contributes to the Bard's style. In our research that has been done so far, it is clear that "three" is the number of such repetition or lining up most often observed and "this gives life"¹⁾ to Shakespeare's artistic technique with strong intention. In this paper, we will examine the rhetorical art in *Henry the Fifth* (H5), which is composed of 60% of verse and 40% of prose. What difference can be found out between H5 with such mixed style and the Trilogy of H6 composed of only blank verse, is another topic in this paper.

はじめに

史実の順番でいえばヘンリー六世の父ヘンリー五世の物語が先に語られるはずだが、シェイクスピアは先に紹介したデビュー作となる『ヘンリー六世』三部作（以下1H6, 2H6, 3H6²⁾と『リチャード三世』（以下R3）の第一四部作を書いた後、さらに英王室の歴史を遡り『エドワード三世』、『ジョン王』、『リチャード二世』、『ヘンリー四世』二部作、そして『ヘンリー五世』（以下H5）を執筆した。拙論では、これまでの研究法を踏襲しながら「くり返しの表現」がどのように本作品において現れるかを観察していきたい。文体に関してH5とH6三部作との大きな違いはといえば、H6三部作はほとんど全行がブランク・ヴァース（韻文）で書かれているのに対し、H5になると全3381行のうち韻文が2056行（61%）、散文が1325行（39%）と、韻文に交じってかなりの割合が散文体によるセリフで占められていることがわかる。そこで「くり返し」の技法は韻文と散

¹⁾ "So long lives this, and this gives life to thee." Sonnet 18, l. 14.

²⁾ 拙論『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—Henry the Sixth Part Oneに見る反復表現』（学習院女子大学紀要第10号, 2008年）、『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—Henry the Sixth Part Twoに見る反復表現』（学習院女子大学紀要第11号, 2009年）、『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—Henry the Sixth Part Threeに見る反復表現』（学習院女子大学紀要第12号, 2010年）

文でどのような違いが出るか、についても観察してみたい。

1. プロローグ: 炎の女神ミューズよ

この作品は、ヘンリー五世率いる英軍とフランス軍の駆け引きと激烈な戦闘、その間に登場する様々な登場人物たちの様子をイングランドとフランスの両方を舞台に描きながら、ドラマが展開する。その場面と時間経過の切り替えを観客に分かりやすく伝える役としてコーラス（説明役）³⁾ が全5幕の各冒頭で登場する。そしてこの5場面の彼のセリフの中にも必ず「(言葉の) 三度の反復または並列」が含まれ、幕開けで登場するコーラスの最初から3行目で早くもこの修辞法の響きが聴かれる。

Prologue.
 O for a Muse of fire, that would ascend 1
 The brightest heaven of invention!
 A kingdom for a stage, princes to act,
 And monarchs to behold the swelling scene!
 Then should the warlike Harry, ... 5
 Assume the port of Mars ...
 ... should famine, sword, and fire
 Crouch for employment.

プロローグ
 おお、女神ミューズ⁴⁾よ、その炎を噴き上げたまえ
 創造の輝かしい天頂まで！
 舞台には王国を、演じる王侯貴族らを、
 そして帝王らを、この壮大な芝居を見守るために与えたまえ！
 さすれば武門の誉れ高きヘンリーも…
 軍神マルス⁵⁾の姿で現れ、…
 … 飢餓と、剣と、火とが
 控えることでありましょう。(H5, Prologue 1-8)

³⁾ コーラス役の本書きは拙論でテキストとして用いるリバーサイド版では“Enter Prologue”となっており、拙論でもそのままPrologueを踏襲する。

⁴⁾ ミューズ: ギリシャ神話の音楽・舞踏・学術・文芸などを司る女神（たち）元は複数形。仏語、英語で単数形となっている。

⁵⁾ Mars: ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典によると「ギリシア神話のアレスと同一視された古代ローマの軍神。ユピテル、クイリヌスとともに大フラメンの祭祀を受け、元来は三大主神格の一つであったと思われる。ローマ初代の王ロムルスとその双子の兄弟レムスは、マルスが、ウェスタの巫女にされていたアルバ・ロンガのヌミトル王の娘レア・シルウィアと交わってもうけた子であった」とある。シェイクスピアでは全43作品中50回の頻度で用いられている。(The Harvard Concordance to Shakespeare)

こうして1幕1場が始まると、カンタベリーの司教がイーリーの司教に、ヘンリー五世がハル王子 (Prince Hal) と呼ばれた若い頃の放蕩さを 'his addiction...' と 'any study...' のパリエーション3つを使って、次のように語る。

The Archbishop of Canterbury.

Since his addiction was to courses vain, 54

His companies unletter'd, rude and shallow,

His hours fill'd up with riots, banquets, sports;

And never noted in him any study,

Any retirement, any sequestration

From open haunts and popularity. 59

カンタベリー大司教

陛下のお好みはくだらぬ遊びで、

陛下のお仲間は無学で、粗暴、軽薄な輩たち、

陛下のご日課は馬鹿騒ぎや宴会、気晴らしなど、

決して見られることがなかったのは、学問をなさったり、

お一人になられたり、離れてお過ごしになるお姿だ、

大衆の出入りする盛り場から離れて。(H5 1. 1. 54-59)

その遊び人だったヘンリーが国王となり、若い時に鍛えた武人としての力だけでなく、政治家としての手腕を見せるのが1幕2場の終りである。「フランスの領土はやれぬ」という仏皇太子のヘンリーに対する侮蔑の伝言に対し、彼がたたきつけた返事は次のような「愚弄してやる (mock)」を三度繰り返す激しい宣戦布告であった。

King Henry. ... for many a thousand widows 284

Shall this his mock mock out of their dear husbands;

Mock mothers from their sons, mock castles down;

...

That shall have cause to curse the Dolphin's scorn. 288

ヘンリー … 何千人もの妻を

彼は嘲弄し、その嘲弄は彼女らの愛しい夫らを嘲弄し、

母を嘲弄し息子らを奪い、城を嘲弄し崩壊させるだろう。

...

それにより仏皇太子の嘲弄も呪われることになるだろう。(H5 1. 2. 284-288)

2. ピistolとニム：下級兵士の戯言

2幕1場では下級兵士ピistol、ニムらの他愛ない日常茶飯事の会話が前場1幕の緊張感をほぐす。ここではピistol中尉が韻文で話すのに対し、ニム伍長は散文で“solus”（一人で）という言葉を巡ってやり取りする。ニムがピistolに“you”で、ピistolはニムに“thou”で話すので明らかにピistolの方がニムに対し上官であることも分かる。

Nym. Will you shog off? I would have you **solus**. 45
Pistol. “**Solus**,” egregious dog? O viper vile!
 The “**solus**” in thy most mervailous face,
 The “**solus**” in thy teeth, and in thy throat,
 And in thy hateful lungs, yea, in thy maw, perdy;
 And which is worse, *within thy nasty mouth!* 50
 ニム 向うへ行かないか？あんたを一人にして決着つけてやるぜ。
 ピistol 「一人にして」だと、この犬が？忌まわしいマムシめ！
 「一人に」はお前のみょうちきりんな顔にたたき返してやる、
 「一人に」をお前の歯に、お前の喉に、
 お前の憎むべき肺臓に、それにお前の胃袋に、ああ、
 それと、もっと汚ねえお前の口に、お返した！
 … (H5 2. 1. 45-50)

ピistolはニムの1度の“solus”に三倍返しする。そして“in thy throat”の後、“thy… lungs”, “thy maw”, “thy… mouth”と「お前の～」を6回繰り返して仕返ししている。

続く2幕2場は再び舞台が王宮へ戻り、ヘンリー王が裏切った貴族3名を処刑するという容赦ない場面である。処刑後、王は何事もなかったかのように、次の3つのフレーズとともに兵を率いて、いよいよフランスへ出陣してゆく。

King Henry. **Cheerly to sea! The signs of war advance!**
No king of England, if not king of France!
 ヘンリー 勇みて、海へ乗り出そうぞ！軍旗を掲げるのだ！
イングランド国王など意味はない、フランス王でなければ！
 (H5 2. 2. 192-3)

若き日のヘンリー、ハル王子の悪友フォルスタッフの死が、次の2幕3場で、宿屋の女将クイックリーのセリフによって再現される。最後は“God, God, God!”（神よ…）を3回繰り返して息を引き取った、と彼女は言う。そして彼女がフォルスタッフの足を手

でさわると、「石のように冷たくなっていた」と描写する。余談だが、敬愛する小田島訳では「冷たくなって…」が3回繰り返されるが、原文では残念ながら“... as cold as any stone”⁶⁾が2回のみである。

3. 男たちの戦い、女たちの戦い

3幕に入るといよいよフランスでの戦闘シーンが展開される。3幕1場の冒頭、堅い守りの仏軍に対し、“Once more unto the breach...”（もう一度あの突破口へ突撃！）（H5 3. 1. 1.）の掛け声に始まり、“Cry, ‘God for *Harry, England, and Saint George!*’”（突撃しながら叫べ「神よハリーにお見方を、イングランドにお味方を、聖ジョージに、お見方を！」と）（H5 3. 1. 34）と兵士たちに檄を飛ばし敵陣深くヘンリーは突進していく。

3幕2場は同じ戦場で、バードルフ、ピストル、ニムら兵士たちが戦闘の悲惨さをぼやいている。そして3幕4場、男たちの戦いの最中、フランスの王宮では、キャサリン妃が侍女アリス相手に英語の練習をしている。この場面はすべてフランス語でセリフが語られるが、注意して読む（聴いている）と、キャサリンが英単語を3つ並べているのがわかる。

Alice. Les ongles? Nous les appelons *de nailes*. (= The nails? We call them de nails.)

Katherine. De nailes. Ecourtez, dites-moi si je parle bien: *de hand, de fingres*, et *de nailes*. (= “Listen, tell me whether I speak correctly: de hand, de fingres, and de nailes.”)

アリス。「爪」ですか？私たちはそれをド・ネイルズといます。

キャサリン。ド・ネイルズ... 聞いて、私正しく言えてるかしら、ド・ハンド、ド・フィングルズ、ド・ネイルズ... (H5. 3. 4. 16-18)

ところで、侍女アリスの英語も少し怪しい。彼女が“de nails”と発音している“de”はフランス語の前置詞 de(=of) ではなく、英語の定冠詞 the のつもりなのだろう。通常弱いアクセントで発音される the は仏語の de に近い音かもしれない。この数行後に「肘は？」と王女に聞かれ、“D’elbow.”（デルポー）とアリスが答える。仏語の得意な方はご存じのとおり、deの後に母音で始まる名詞が続くと、deの-eが省略されるが、発音は同じ。⁷⁾そして王妃が「習った単語を繰り返し発音してみよう」と次のセリフを繰り返す：

⁶⁾ H5 2. 3. 19-26参照。

⁷⁾ “D’elbow.”は但し、仏語なら/delbou/のように子音と母音が接続したりエゾンの発音となる。

Katherine. Je m'en fais la *repetition* de tous les mots que vous m'avez appris des a *present*. (= I'm going to repeat all the words you have taught me so far.)

キャサリン. 今まで習った言葉を全部くり返してみるわ。(H5 3. 4. 25-26)

筆者同様に「英語以外は苦手」という方でも上の2行中の“repetition”, “present”はそのまま英語の単語として理解できよう。次の3幕5場では仏皇太子とブルボン公爵と英軍を「ノルマン人の子孫のくせに」と罵るのに次のセリフを繰り返す。ここでも「3回」が見られる。

Dolphin. O Dieu vivant! Shall a few sprays of us,
The emptying of our fathers' luxury,
Our scions, put in wild and savage stock,
Spirt up so suddenly into the clouds
And overlook their grafters?

Bourbon. Normans, but bastard Normans, Norman bastards!

皇太子 生ける神よ！我らフランス人の小枝、
我が祖先の情欲からこぼれ落ちた
接ぎ木たちが、野生の卑しい台木から
伸びて雲を突き抜けるほどに
元の木を見下ろすなど（あっていいものか）？
ブルボン公爵 ノルマン人め、だが私生児ノルマン人、ノルマン人の
私生児め！（H5 3. 5. 5-10）

このようにこの作品は英語がフランス語と深く関わるようになった歴史的背景も反映している。5幕ではヘンリー五世がキャサリンを王妃にと、求婚するシーンがあるが、キャサリンはそのことを予測してかどうかはわからないが、「敵国の言葉」を覚えることで戦っているのである。しかし彼女の戦いは英仏両国間の平和をもたらす戦いである。一方3幕7場で、皇太子らが自分たちの鎧兜の美しさ、馬の素晴らしさを自慢して油断していたフランス軍は、次の4幕で惨めな敗北を見るのである。

4. アジンコート of 戦い

歴史の上では1415年10月25日の夜明け前、いよいよアジンコート⁸⁾での英軍と仏軍の

⁸⁾ 堀越によれば「1415年8月、ヘンリー五世が3万の軍勢をノルマンディーに上陸させたが、悪疫流行のため1万の人員を失ったヘンリーは、冬越しのためカレーに向かって北上。カレーはすでにイングランド王家の支配地であった。（しかし）6万のフランス王軍が北仏のカレー南東50kmの小村アザンクールAzincourtにて10月25日これを迎撃した」とある。

決戦の始まる直前から第4幕が始まる。英軍陣地では、カレーへ退却途中、行軍の疲れや疫病にかかった兵士たちも出始め、弱り目に祟り目の状況の中、ヘンリー五世が“'tis true that we are in great danger,”（我々が危機に瀕しているのは事実だ。H5 4. 1. 1）と戦う前から不利な戦況を危惧する。そうは言いながらも兵士を気遣う国王は兵士たちのテントを見回りながら3カ所のテントで兵士たちに出会う。

最初は前述の2章で紹介したピストル中尉。部下のアーピングムから借りた外套を被ったヘンリーを王と気づかずピストルは、仏軍のスパイと間違えたのか、仏語で“Qui vous la?”（= Who are you there?）と話しかける。“A friend.”と英語でヘンリーが返事すると、ピストルは自分がいかに王を信頼しているかを語り、去っていく。

次はフルーエリンとガワー。彼らの戦争に対する心構えができている様子を見て安心するヘンリー。そして3組目はベーツ、コート、ウィリアムズの3兵士。不安な戦況を案ずる三人に王は、“The King is but a man, as I am. The violet smells to him as it doth to me; the element shows to him as it doth to me.”（王様だって俺と同じ人間だ。スマレの花が彼に匂うのは俺と同じだ。大空も俺と同じように彼に見えているはず。H5 4. 1. 101-102）と語り、落ち着かせようとするが、ウィリアムズが“if these men do not die well, it will be a black matter for the King that led them to it;”（もし兵士らがろくな死に方しなかったら、そういう目に遭わせた王様の罪はえらいもんだらう。H5 4. 1. 144-146）と反論する。そこで王は一人一人の兵士の死が無駄ではなく、生き残った兵士には生がいかに大切なものであるかを伝えようと次のように語る。

“...should every soldier in the wars ... wash every mote out of his conscience; and dying so, death is to him advantage; or not dying, the time was blessedly lost wherein such preparation was gain'd; and in him that escapes, it were not sin to think that... He let him outlive... to teach others how they should prepare.”

戦場の兵士は自分の良心の塵を洗い清めるべきだ、そうやって死ねば、死は彼にとって好ましい機会となるし、死ななければ、心の準備を得るために失った時間は祝福されるだろう。そして死を免れた者はこう考えても罪にはならんだらう、すなわち神が彼を生かしてくださったのだ、他の者たちに心の準備がいかに大切かということを教えさせるために。（H5 4. 1. 178-185）

こう部下たちを説得したヘンリー自身は、改めて王としての自分の責任の重さに苛まされ、苦渋の気持ちを伝える54行の長セリフを語ることになるが、最後は（戦の）神に武運を祈り、出陣していく。

H6～R3の四部作では度々戦闘シーンが舞台上で展開されるが、H5では実際の戦闘シーンは次の4幕3～4場の一カ所だけである。その4幕3場の冒頭で国王の貴族たち

が、英軍一人に対し、仏軍五人⁹⁾という眼前のフランスの大軍に度肝を抜かれ、ウェストモランド伯が「あと一万人の助っ人がいれば」¹⁰⁾とぼやくと、ヘンリーが最後の叱咤激励とばかりに次の演説をぶつ。ここではその全47行に及ぶ長大なセリフから後半の27行を紹介する。

King Henry. This day is call'd the feast of *Crispian*. 40
He that outlives this day, and comes safe home,
Will stand a' tiptoe when this day is named,
And rouse him at the name of *Crispian*.
He that shall see this day, and live old age,
Will yearly on the vigil feast his neighbors, 45
And say, "To-morrow is Saint *Crispian*."
Then will he strip his sleeve and show his scars,
And say, "These wounds I had on *Crispin's* day."
 Old men forget; yet all shall be forgot,
 But he'll remember with advantages 50
 What feats he did that day. Then shall our names,
 Familiar in his mouth as household words,
Harry the King, Bedford and Exeter,
Warwick and Talbot, Salisbury and Gloucester,
 Be in their flowing cups freshly remember'd. 55
 This story shall the good man teach his son;
 And Crispin *Crispian* shall ne'er go by,
 From this day to the ending of the world,
 But we in it shall be remembered—
We few, we happy few, we band of brothers; 60
 For he to-day that sheds his blood with me
 Shall be my brother; be he ne'er so vile,
 This day shall gentle his condition;
 And gentlemen in England, now a-bed,
 Shall think themselves accurs'd they were not here; 65
 And hold their manhoods cheap whiles any speaks

⁹⁾ 「英軍一人に対し、仏軍五人」 Westmerland. "Of fighting men they have full threescore thousand." Exeter. "There's five to one..." (H5 4. 3. 3-4)

¹⁰⁾ 「あと一万人の今日イングランドで暇な助っ人がいれば」 Westmerland. "O that we had here But one ten thousand of those men in England That do no work to-day!" (H5 4. 3. 16-17)

That fought with us upon Saint *Crispin's* Day.

今日は聖クリスピアン¹¹⁾の祭日だ、40
 今日を生き延びて故郷に無事帰る者は
 今日の出来事が話題に挙がるたびに我知らず胸を張り、
 聖クリスピアンの名を聞くたびに誇らしく思うのだ。
 今日を生き延びて穏やかに老いを迎える者は
 その前夜祭が来るたびに近所の人々を宴に招き、45
 「明日は聖クリスピアンの祭日」と言うのだ、
 そして袖まくりして、古傷を見せながら、
 「聖クリスピアンの日に受けた傷だ」と言うのだ。
 老人は忘れやすい、他の全てを忘れたとしても、
 しかし思い出さだろう、大風呂敷を広げて50
 この日に立てた手絡だけは。そして我らの名は
 日々の挨拶のごとく繰り返され、親しいものとなるのだ。
 国王ハリー、ベッドフォード、エクセター、
 ウォリック、そしてトールボット、ソールズベリー、グロスター、
 溢れる杯を飲み干すたびに新たにこれらの名が記憶に留められよう。55
 この物語は善良な父から息子へと語り継がれ、
 そして聖クリスピアンの日は決して忘れ去られることはないだろう、
 今日から世の終わりの日まで、
 その日に我らのことも共に思い出されることだろう。
 我ら、少数だ、我ら幸せな少数は、我ら一つに結ばれた兄弟だ。60
 なぜなら今日、私とともに血を流す者は、
 私の兄弟となるからだ。どれほど卑しい身分であっても、
 今日の日がその身分を貴族と等しくしてくれるのだ。
 そしてイングランドで今頃ベッドに体を横たえている貴族たちは、
 自らを呪うだろう、ここに加わっていなかったことを悔やみ、65
 そして男の面目を失い負い目を感じるだろう、誰かが話をするたびに、
 彼は我らと共に戦ったと、聖クリスピアンの日に。(H5 4. 3. 40-67)

この演説の中で、際立つ修辞法は、まずヘンリー五世が“Crispian”を繰り返していることである。各語の間隔が空いているのでわかりにくいかもしれないが、注意してみると6回（3の倍数）くり返している。さらに41行から48行目までで、“He that...will...”のパターンを3つ並べている。3つ目（47行）は2つ目（44～46行）の“He that shall

¹¹⁾ クリスピヌスとクリスピニアヌスという兄弟のキリスト教殉教者で、ガリアの靴屋として死後、靴屋の守護聖人とされる。(オクスフォード・キリスト教辞典)

see this day, and live old age, Will yearly on the vigil feast his neighbors,”を省き、簡略にまとめている。そして53行から54行で自分も含め、主だった部下たちの名を挙げていく。その瞬間、絶望で伏し目がちになっていた貴族たちの目が希望に輝きだす。¹²⁾自分たち一人ひとりが王にいかにか重用されているかを再認識するのである。60行目の3度の“we…”も効果的である。「兵の数は少ないが、その分我らの結束は固い、この団結の戦果は一生語り継がれ、参加しなかった者たちの羨むような名誉となるのだ—その日が今日、聖クリスピアンの日なのだ」と嫌がおうにも兵士たちの士気を盛り上げる。

史実によれば¹³⁾、「フランスの大軍は動きが鈍く、指揮系統にも乱れがあり、さらに当日の悪天候でアジンコートの戦場はぬかるんでいた。それに対し、英軍は少数ながら弾道距離の長いロングボウ（長弓）で仏軍に雨あられのごとく矢を射かけ混乱させた」とあるが、シェイクスピアの舞台では国王ヘンリー五世のこの「言葉の力」が疲弊した英軍の兵士たちに活力を与え、勝利を導いたのは言うまでもない。戦の後、王と部下たちは旧約聖書・詩篇から取られた歌“Non nobis”¹⁴⁾を歌いながらイングランドへ凱旋する。“Not unto us, O Lord, not unto us, but unto thy name give glory.”「私たちにではなく、主よ私たちにではなく、あなたの御名にこそ、栄光が与えられますように」。これも前置詞句“unto us”が3回繰り返えされて神の栄光を讃える歌詞となっている。

5. 獅子と白ユリ¹⁵⁾

『ヘンリー五世』の最後を飾る5幕2場は全部で374行だが、そのうち約半分の182行がヘンリーのキャサリン妃へのプロポーズ・シーンに充てられている。アジンコートの戦いで勝利し、さらにフランスにおける英領土を広げていくヘンリー五世が、ひとまずフランス王シャルル六世と和平条約を結び、その見返りとして国王の王女キャサリンを自分の妃にと提案する。シャルルにとっては敗北者として恭順の証として娘はいやおうなしに差し出さねばならぬ立場、それに対して、ヘンリーは勝者として、わざわざ求婚などしなくてもキャサリンを娶ることができる立場だが、この長い場面で敢えて丁重に彼女の承諾を得ようと、再び得意な弁舌を披露する。ここで注意すべきはシェイクスピアが国王に散文で求愛の言葉を喋らせている点である。その理由を考察するために以下の3カ所に注目してみた。「3回の反復」はここでも健在である。

¹²⁾ ケネス・ブラナー監督・主演『ヘンリー五世』、1989年イギリス

¹³⁾ <https://www.historic-uk.com/HistoryUK/HistoryofEngland/The-Longbow/>

¹⁴⁾ “Non nobis” Psalm 115, beginning “Not unto us, O Lord, not unto us, but unto thy name give glory.”旧約聖書・詩篇115章1節。

¹⁵⁾ 獅子（ライオン）はヘンリー二世以来イングランドの紋章、白ユリはフランス王室の紋章とされてきた。英軍と仏軍の戦闘とその後のヘンリー五世のキャサリン妃の結婚を象徴する意味で獅子と白ユリを使っている。本文末の図（イングランド王室とフランス王室の紋章）参照。https://en.wikipedia.org/wiki/Royal_Arms_of_England; <https://frenchmoments.eu/coat-of-arms-of-the-french-republic/>

King Henry. Marry, **if you** would put me to verses, or to dance for your sake, Kate, why, **you undid me**: for the one, I have neither words nor **measure**; and for the other, I have no strength in **measure**, yet a reasonable **measure** in strength. **If I** could win a lady at leap-frog, or by vaulting into my saddle with my armor on my back, **I should** quickly leap into a wife. Or **if I** might buffer for my love, or bound my horse for her favors, **I could** lay on like a butcher, and sit like a jack-an-apes, never off.

ヘンリー まあ、もしあなたが、私にあなたのために詩を作れとか、あなたのためにダンスを踊れと言うのなら、私はお手上げだ、ケイト、何故なら詩は、言葉も韻律もわからない、ダンスはといえば、踊り方も知らない、喧嘩に駆けつける足の運び方なら心得てはいるが。もし私が馬跳びで、あるいは甲冑のまま馬の鞍に飛び乗ることで、ご婦人の愛を勝ち得ることができるものなら、私はすぐに妻にも飛び乗ってみせよう。もし私が恋人のために殴り合いをしろと言われてたり、馬を飛び跳ねさせろと言われるなら、私は屠殺人のごとくに飛び掛かるし、曲芸のサルのように馬の背に乗って、決して落ちたりしないだろう。(H5 5. 2. 132-142)

原文中の網掛けで明確なように、“If...”のパターンが3回見られるが、1度目は“if you...”, 2度目と3度目は“If I...”と、「あなたが～なら、私は～だ、～だ」と主張を進める。また1度目の“if you...”, の後に“measure”が3回使われるが、いずれも異義語でシェイクスピアが言葉遊びをしているのが分かる。

また次の数行においても同じ“If...”のパターンを3回使い、王はキャサリン王女に問いかける。

King Henry. **If thou** canst love a fellow of this temper, Kate, whose face is not worth sunburning, that never looks in his glass for love of any thing he sees there, let thine eye be thy cook. I speak to thee plain soldier. **If thou** canst love me for this, take me! **If not**, to say to thee that I shall die, is true, but for thy love, by the Lord, no; yet I love thee too.

ヘンリー もし君が、こういう気性の男を愛することができれば、ケイト、その顔がもはや日に焼けるまでもないほど黒く、鏡に写して得意になれない顔でも、愛することができれば、君の目で料理して私を見てくれ。率直な軍人として言おう。もし君がこんな男でも愛することができるというなら、私の妻になってくれ！もし（君が）できないのなら、私を殺せと言うだろう、真実だ、君を愛するがゆえに、嘘ではない、神に誓って、違うと言われようが、私も君を愛しているからだ。(H5 5. 2. 146-152)

そして三度目のダメ押しである。フランス人のキャサリンをイングランドのヘンリーがどう口説き落とせるか。しかもヘンリーから自国の領土を奪われた彼女に征服者とし

てより、夫として愛してもらえる存在であることを認めてもらうため、ヘンリーは彼女と自分とフランスがどのような関係であるべきか、を以下のように王女に語るのである。

King Henry. ...it is possible **you** should love **the enemy of France**, Kate; but in loving me, **you** should love **the friend of France**; for **I** love **France** so well that **I** will not part with a village of it; **I** will have it **all mine**. And, Kate, when **France** is **mine** and **I** am **yours**, then **yours** is **France** and **you** are **mine**.

ヘンリー あなたがフランスの敵を愛することは不可能だ、ケイト。だが、私を愛することはフランスの友人を愛することだ、私はフランスを愛している、だからその村一つさえ手放すつもりはない、全てを私のものにしたいのだ、そしてケイト、フランスが私のものであり、私があなたのものなら、フランスはあなたのものであり、あなたは私のものなのだ。(H5 5. 2. 171-176)

「フランス」「あなた」「私」という三角関係をうまくそれぞれをつなぎ合わせながら「フランス」「あなた」「私」は三位一体なのだと言葉で愛を勝ち得る。

王女に対する呼びかけが“you”, “thou”と変化していることにも触れておきたい。ここでは敢えて“you”, “thou”の違いを「あなた」「君」と区別して訳したが、元々MEからEModEまで日常存在した“you”, “thou”の使い分けはシェイクスピアではほとんど無くなっていた、と一般には考えられている。ではなぜシェイクスピアはこの2つの二人称代名詞を用いるのだろうか。“you”, “thou”の併用は他のシェイクスピア作品でもしばしば見られ、¹⁶⁾面白いことに男性は相手の女性に“you”, “thou”を交互に使うのに対し、女性は男性に対し“you”のみである。しいて言うならば、美しいフランス王女を目の前にして、ときに“you”とあらたまった呼びかけをし、ときに“thou”と、くだけた調子で呼びかけたり、と王の心も揺れていることを示したものと解釈したい。

最後はフランス王妃イザベラがヘンリーとキャサリン王女の結婚を祝福して、次のセリフでフランスとイングランドが一つになることを願い芝居は幕となる。¹⁷⁾

Queen Isabel. God, the best maker of all marriages, 359
Combine your hearts **in one**, your realms **in one!**
As **man and wife**, being two, are **one** in love, 361
So be there 'twixt your kingdoms such a spousal,

¹⁶⁾ ADO 4. 1. 255-336など参照。

¹⁷⁾ 実際にはイザベルのセリフの後、全員が退場、コーラス役が登場し、その後のヘンリー五世の治世の繁栄、その後即位したヘンリー六世の不幸を告げて幕となる。

王妃イサベル 全ての結婚の最高の結び手である神が、
結ばれますように、お二人の心を一つに、お二人の領土も一つに
夫と妻は、体は二つでも、愛においては一つですから。
同じようにお二人の王国も夫婦のようでありますように。(H5 5. 2. 359-362)

上の王妃のセリフ中、網掛けで示した“in one” (360) と“one in love” (361) がイザベルのメッセージの核をなしているといえる。すなわち、ヘンリー王とキャサリン、すなわちイングランドとフランスの夫と妻が心を一つにすることで、領土も一つになる、すなわち夫と妻が一心同体であれば両国の関係も同様になる、と言っているのである。“man and wife” と“one flesh” は聖書の引用である。シェイクスピアも幼少時から読まされたはずのジュネーヴ訳聖書には“... shall **a man** leave father and mother, and cleave unto **his wife**, and they twain, shall be **one flesh**.” (…人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。) ¹⁸⁾ とあり、シェイクスピアはハムレットにもこの引用を語らせている。¹⁹⁾

まとめ

ここまで観察してきた結果を簡単にまとめるならば以下のとおりである。

1. シェイクスピアは第二歴史劇四部作²⁰⁾の4作目で歴史劇としては初めてプロローグ役を登場させた。そのプロローグ役の最初の台詞中の3行で“*A kingdom for a stage, princes to act, / And monarchs to behold the swelling scene / ... should famine, sword, and fire*”のように、この芝居を構成する3人の人物たちと、戦争を背景に生み出される3つの状況が語られ、たちまち観客は自分たちが芝居小屋の中から、ヘンリー五世やフランスの宮廷、はたまた弓矢の飛び交う戦場（などの仮想空間）へと我が身を瞬時に移動させているのを実感することであろう。

2. 様々な階層の人物らを登場させ、人間の幅広い世界を描くのがシェイクスピア劇の特徴であるのは今更言うまでもないが、2幕では王や貴族らに代わり、下級兵士ピストル、ニムらが仲間内の日常の喧嘩で1幕の緊張感をほぐしている。ここで肝心な点は、ピストル中尉が韻文で、それに対しニム伍長は散文で一つの言葉“solus”を巡ってやり取りし、ここにも「3回のくりかえし」が見られるということである。このように文体の違いを超えて、3度の反復やヴァリエーションは用いられ、セリフをとおして登場人物の性格を生き生きと聴き手（読者）に伝える役割も果たしている。

3. 3幕でシーンは再び戦場へと移るが、ヘンリー五世王の勇ましい鼓舞が“Cry, ‘God for Harry, England, and Saint George!’” (H5 3. 1. 34) と3つのヴァリエーション

¹⁸⁾ Geneva Version of the Bible, Matthew 19:5 <http://www.genevabible.org/geneva.html>

¹⁹⁾ “father and mother is man and wife, man and wife is one flesh” *Hamlet*, Act 4 Scene 4, ll. 51-52.

²⁰⁾ 一般に1H6～3H6とR3を第1四部作、R2, 1H4, 2H4, H5を第2四部作と区別する。その間に*King John*, *Edward the Third*, そして最後の歴史劇H8がある。シェイクスピアがプロローグ役を最初に登場させたのはR2執筆の翌年1596年の*Romeo and Juliet*においてである。ちなみに歴史劇でプロローグが登場する作品はH5とH8の二作のみである。

で表現される。3幕2場は同じ戦場で、バードルフ、ピストル、ニムら兵士たちが戦闘の悲惨さを“Abate thy rage”と3回ほやいている。そして3幕4場、フランスの宮廷では、キャサリン妃が侍女アリス相手に英単語を3つずつヴァリエーションで並べて練習した。3幕5場で再び仏皇太子や侯爵ら男たちのシーンに戻ると、彼らもヴァリエーションで英軍に対するswear wordsを並べていた。“Shall *a few sprays of us, / The emptying of our fathers' luxury, / Our scions*, (我がフランス人の祖先の情欲からこぼれ落ちた接ぎ木らめ。H5 3. 5. 5-6); “*Normans, but bastard Normans, Norman bastards!*” (ノルマン人の私生児め! H5 3. 5. 5-10) など。

4. 英仏両軍の対戦シーンは実は4幕3～4場の連続であるが、その4幕3場で兵力において圧倒的無勢に立たされた英軍を鼓舞するヘンリー五世のスピーチが見せ場の一つとなっている。そのスピーチでも、特に後半、“St. Crispin”という守護聖人のキーワードを6回繰り返すことが「戦闘に対する恐怖の克服、少数であることの優位さ、勝利のあかつきの名誉」という兵士たちのモチベーションを高めるのに貢献している。

5. アジンコートでの戦いで勝利したヘンリー五世がフランス王と和平調停を結び、王女キャサリンに求愛する場面で、王は自分と王女、そして英仏両国の関係を“man”, “wife”, “one flesh”という聖書の言葉に置き換え、二人の結婚は単に二人の幸せだけでなく、国と国どおしの幸福でもある、二人が結ばれて一つになることの意味を“one”を3度くり返しなが、王女の結婚に対する決断を促すことに成功した。力づくではなく言葉によって愛を勝ち得たのである。その言葉の効果として、上述の2, 3, 4でも指摘したように、シェイクスピアがヘンリー五世や貴族たちに、ときに散文体でもセリフを語らせ、その散文においても「三度のくり返し」または「三つのヴァリエーション」を並べるといった修辭法がここでも観察された。

シェイクスピアは英仏百年戦争の悲惨な状況を舞台にした本作品の最後に「平和」の光を一時的にでも燈すことにより、観る人々に安らぎを与えている。また同時に「戦争」「平和」そしてまた「戦争」のくり返し、その後近代を経て20世紀まで続くイギリスの他国との戦争の歴史を暗示しているようでもある。

参考文献

- Abbott, E. A. *A Shakespearian Grammar*. Macmillan. 1929.
 Brook, G. L. *The Language of Shakespeare*. Andre Deutsch. 1976.
 Booth, Stephen. *Shakespeare's language and the language of Shakespeare's time*. Cambridge University Press, 1997.
 Palfrey, Simon. *Doing Shakespeare*. The Arden Shakespeare, Thomson. 2005.
 Thomas A. Pendleton. *Henry VI Critical Essays*. Routledge. 2001.
 McDonald, Russ. *Shakespeare and the Arts of Language*. Oxford University Press. 2001.
 Schmidt, Alexander. *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*. Vol.2. Dover. 1971.
 Spevack, Marvin. *The Harvard Concordance to Shakespeare*. Georg Olms. 1970.

Leslie Dunton-Downer and Alan Riding, *Essential Shakespeare Handbook*. Dorling Kindersley ltd. 12004.

The Riverside Shakespeare. Edited by G. Blakemore Evans, Houghton Mifflin. 1974.

The Complete Pelican Shakespeare. Edited by Alfred Harbage. The Viking Press. 1969.

The Oxford English Dictionary

オックスフォードキリスト教辞典 E. A. リヴィングストン編 木寺康太訳 教文館. 2016.

ジーニアス英和大辞典 大修館書店

G. L. ブルック. 『シェイクスピアの英語』 三輪伸治他訳 松柏社. 1998.

青木敦男・古庄 信共編『藤原博先生追悼論文集—見よ野のユリはいかに育つかを』 英宝社. 2007.

梅田倍男『シェイクスピアのレトレック』 英宝社. 2005.

堀越孝一「アジンコートの戦い」(ブリタニカ国際大百科事典)

レスリー・ダントン=ダウナー, アラン・ライディング『シェイクスピアヴィジュアル事典』 水谷八也・水谷利美訳 新樹社. 2006.

古庄 信『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—Henry the Sixth Part Oneに見る反復表現』(学習院女子大学紀要第10号, 2008年)

古庄 信『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—Henry the Sixth Part Twoに見る反復表現』(学習院女子大学紀要第11号, 2009年)

古庄 信『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—Henry the Sixth Part Threeに見る反復表現』(学習院女子大学紀要第12号, 2010年)

古庄 信『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—Othelloに見る反復表現』(学習院女子大学紀要第13号, 2011年)

古庄 信『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—The Merchant of Veniceに見る反復表現』(学習院女子大学紀要第14号, 2012年)

古庄 信『Macbethにおける言葉の魅力について—韻律と修辞法の観点から』(学習院女子大学紀要第15号, 2013年)

古庄 信『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—The Taming of the Shrewにおける反復技法』(学習院女子大学紀要第16号, 2014年)

古庄 信『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—「十二夜」に見る反復技法』(学習院女子大学紀要第20号, 2018年)

古庄 信『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—「夏の夜の夢」に見る反復技法』(学習院女子大学紀要第22号, 2020年)

Web site

<https://www.historic-uk.com/HistoryUK/HistoryofEngland/The-Longbow/>

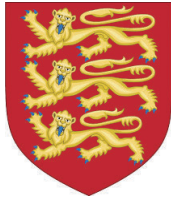
<http://www.genevabile.org/geneva.html>

https://en.wikipedia.org/wiki/Royal_Arms_of_England

<https://frenchmoments.eu/coat-of-arms-of-the-french-republic/>

<https://kotobank.jp/word/アザンクールの戦い> (ブリタニカ国際大百科事典)

◆イングランド王室とフランス王室の紋章



上図：左からイングランド・リチャード1世の紋章（赤地に金の獅子）、真ん中がエドワード3世、右はフランス王室のゆりの紋章（青地に金のユリがあしらわれている）。百年戦争を始めたエドワード3世はイングランドのライオンの紋章にフランスのユリの紋章を各々半分ずつ加え、フランスの支配権をも誇示した。

(本学教授)